

源氏物語

行幸

紫式部

青空文庫

雪ちるや日よりかしこくめでたさも上

なき君の玉のおん輿こし

(晶子)

源氏は玉たま鬘かすらに對してあらゆる好意を尽くしているのであるが、人知れぬ恋を持つ点で、南の女王によおうの想像したとおりの不幸な結末を生むのではないかと見えた。すべてのことに形式を重んじる癖があつて、少しでもその点の不足したことは我慢のならぬように思う内大臣の性格であるから、思いやりもなしに媚として麗々しく扱われるようなことになつては今さら醜態で、氣恥ずかしいことであると、その懸念けねんがいささか源氏を躊躇ちゅうちよさせていた。

この十二月に洛西らくさいの大原野の行幸みゆきがあつて、だれも皆お行列の見物に出た。六条院からも夫人がたが車で拝見に行つた。帝みかどは午前六時に御出門になつて、朱雀大路すざくから五条通りを西へ折れてお進みになつた。道路は見物車でうずまるほどである。行幸と申しても必ずしもこうではないのであるが、今日は親王がた、高官たちも皆特別に馬鞍ぐらを整えて、隨身、馬副男うまぞいおとこの背丈せたいまでもよりそろえ、装束に風流を尽くさせてあつた。左右の大臣、

内大臣、納言以下はことごとく供奉したのである。浅葱の色の袍に紅紫の下襲を殿上役人以下五位六位までも着ていた。時々少しずつの雪が空から散って艶な趣を添えた。親王がた、高官たちも鷹使いのたしなみのある人は、野に出てからの用にきれいな狩衣を用意していた。左右の近衛、左右の衛門、左右の兵衛に属した鷹匠たちは大柄な、目だつ摺衣を着ていた。女の目には平生見馴れない見物事であつたから、だれかれとなしに競つて拝観をしようとしたが、貧弱にできた車などは群衆に輪をこわされて哀れな姿で立っていた。桂川の船橋のほとりが最もよい拝観場所で、よい車がここには多かつた。六条院の玉鬘の姫君も見物に出ていた。きれいな身なりをして化粧をした朝臣たちをたくさん見たが、緋のお上着を召した端麗な鳳輦の中の御姿になぞらえることのできるような人はだれもない。玉鬘は人知れず父の大臣に注意を払つたが、噂どおりにはなやかな貫禄のある盛りの男とは見えたが、それも絶対なりつぱさとはいえるものでなくて、だれよりも優秀な人臣と見えるだけである。きれいであるとか、美男だとかいって、若い女房たちが蔭で大騒ぎをしている中将や少将、殿上役人のだれかれなどはまして目にもたず無視せざるをえないのである。帝は源氏の大臣にそっくりなお顔であるが、思いなしか一段崇高な御美貌と拝されるのであつた。でこれを人間世界の最もすぐれた美と申さね

ばならないのである。貴族の男は皆きれいなものであるように玉鬘は源氏や中将を始終見て考えていたのであるが、こんな正装の姿は平生よりも悪く見えるのか、多数の朝臣たちは同じ目鼻を持つ顔とも玉鬘には見えなかった。兵部卿ひょうぶきょうの宮もおいでになった。右大將は羽振りのよい重臣ではあるが今日の武官姿の纓えいを巻いて胡籙やなぐいを負った形などはきわめて優美に見えた。色が黒く、髭ひげの多い顔に玉鬘は好感を持てなかった。男は化粧した女のような白い顔をしているものでないのに、若い玉鬘の心はそれを軽蔑けいべつした。源氏はこのごろ玉鬘に宮仕えを勧めているのであった。今までは自発的にお勤めを始めるのでもなしにやむをえずに御所の人々の中に混じって新しい苦勞をかうようなことはと躊躇する玉鬘であつたが、後宮の一人でなく公式の高等女官になつて陛下へお仕えするのはよいことであるかもしれないと思うようになった。大原野で鳳輦ほうれんが停められ、高官たちは天幕の中で食事をしたり、正装を直衣のうしや狩衣に改めたりしているころに、六条院の大臣から酒や菓子の献上品が届いた。源氏にも供奉ぐぶすることを前に仰せられたのであるが、謹慎日であることによつて御辞退をしたのである。蔵人くらうどの左衛門尉さえもんのかみを御使みつかいにして、木の枝に付けた雉子きじを一羽源氏へ下された。この仰せのお言葉は女である筆者が採録申し上げて誤りでもあつてはならないから省く。

雪深きをしほの山に立つ雉子の古き跡をも今日^{けふ}はたづねよ

御製はこうであつた。これは太政大臣が野の行幸にお供申し上げた先例におよりになつたことであるかもしれない。

源氏の大臣は御使いをかしこんで扱つた。お返事は、

小塩山^{をしほ}みゆき積もれる松原に今日ばかりなる跡やなからん

という歌であつたようである。筆者は覚え違いをしているかもしれない。

その翌日、源氏は西の対へ手紙を書いた。

昨日^{きのう}陛下をお拝みになりましたか。お話ししていたことはどう決めますか。

白い紙へ、簡単に氣どつた跡もなく書かれているのであるが、美しいのをながめて、「ひどいことを」

と玉鬘^{たまかづら}は笑っていたが、よくも心が見透かされたものであるという氣がした。

昨日は、

うちきらし朝曇りせしみゆきにはさやかに空の光やは見し

何が何でもございますやら私などには。

と書いて来た返事を紫の女によう王もいつしよに見た。源氏は宮仕えを玉鬘に勧めた話をした。

「中ちゆうぐう宮が私の子になっておいでになるのだから、同じ家からそれ以上のことがなくて出て行くのをあの人は躊躇することだろうと思うし、大臣の子として出て行くのも女御にようごがいられるのだから不都合だしと煩悶はんもんしているそのことも言っているのですよ。若い女で宮中へ出る資格のある者が陛下を拝見しては御所の勤仕を断念できるものでないはずだ」と源氏が言うのと、

「いやなあなた。お美しいと拝見しても恋愛的に御奉公を考えるのは失礼すぎたことじゃありませんか」

と女王は笑った。

「そうでもない。あなただつて拝見すれば陛下のおそばへ上がりたくありませんよ」
などと言いながら源氏はまた西の対へ書いた。

あかねさす光は空に曇らぬをなどてみゆきに目をきらしけん

ぜひ決心をなさるように。

こんなふうにつて源氏は絶えず勧めていた。ともかくも裳着^{もぎ}の式を行なおうと思つて、その儀式の日の用意を始めさせた。自身ではたいしたことにしようとしないことでも、源氏の家で行なわれることは自然にたいそうなものになつてしまうのであるが、今度のことはこれを機会に内大臣へほんとうのことを知らせようと期している式であつたから、きわめて華美な支度^{したく}になつていった。来春の二月にしようと思つていたのであつた。女は世間から有名な人にされていても、まだ姫君である間は必ずしも親の姓氏を明らかに掲げている必要もないから、今までは藤原^{ふじわら}の内大臣の娘とも、源氏の娘とも明確にしないで済んだが、源氏の望むように宮仕えに出すことにすれば春日^{かすが}の神の氏の子を奪うことになるし、ついに知れるはずのものをしいて当座だけ感情の上からごまかしをするのも自身

の不名誉であると源氏は考えた。平凡な階級の人は安易に姓氏を変えたりもするが、内に流れた親子の血が人為的のことで絶えるものでないから、自然のままに自分の寛大さを大臣に知らしめようと源氏は決めて、裳もの紐ひもを結ぶ役を大臣へ依頼することにしたが、大臣は、去年の冬ごろから御病氣をしておいでになる大宮が、いつどうおなりになるかもしれない場合であるから、祝儀のことに出るのは遠慮すると辞退してきた。中將も夜昼三条の宮へ行つて付ききりのようにして御介かいほう抱かかをしていて、何の余裕も心のないふうな時であるから、裳着は延ばしたものであろうかとも源氏は考えたが、宮がもしお薨かくれになれば玉たま鬘まかずらは孫としての服喪の義務があるのを、知らぬ顔で置かせては罪の深いことにもなろうから、宮の御病氣を別問題として裳着を行ない、大臣へ真相を知らせることも宮の生きておいでになる間にしようと思ひ源氏は決心して、三条の宮をお見舞いしがてらにお訪たずねした。微行しのびとして来たのであるが行幸みゆきにひとしい威儀が知らず知らず添そっていた。美しさはいよいよ光が添そったようなこのごろの源氏を御覧になったことで宮は御病苦が取り去られた気持ちにおなりになつて、脇きようそく息いきへおよりかかりになりながら、弱々しい調子ながらもよくお話しになつた。

「そうお悪くはなかつたのでございますね。中將がひどく御心配申し上げてお話をいたす

ものですから、どんなふうでいらつしやるのかとお案じいたしておりました。御所などへも特別なことのない限りは出ませんで、朝廷の人のようでもなく引きこもっておりまして、自然思いましたもすぐに物事を実行する力もなくなりまして失礼をいたしました。年齢などは私よりもずっと上の人がひどく腰をかがめながらもお役を勤めているのが、昔も今もあるでしょうが、私は生理的にも精神的にも弱者ですから、怠けることよりできないのでございましょう」

などと源氏は言っていた。

「年のせいだと思ひましてね。幾月かの間は身体からだの調子の悪いのも打ちやってあつたのですが、今年になってからはどうやらこの病氣は重いという気がしてきましてね、もう一度こうしてあなたにお目にかかることもできないままになつてしまふのかと心細かつたのですが、お見舞いくださいましたこの感激でまた少し命も延びる気がします。もう私は惜しい命では少しもありません。皆に先だたれましたあとで、一人長く生き残っていることは他人のことで見てもおもしろくないことに思われたことなのですから、早くと先を急ぐ気にもなるのですが、中將がね、親切にね、想像もできないほどよくしてくれましてね、心配もしてくれますのを見ますとまた引き止められる形にもなっております」

初めから終わりまで泣いてお言いになるそのお慄え声もこの場合に身に沁しんで聞かれた。昔の話も出、現在のことも語つていたついでに源氏は言った。

「内大臣は毎日おいでになるでしょうが、私の伺つておりますうちにもしおいでになることがあればお目にかかれて結構だと思います。ぜひお話ししておきたいこともあるのですが、何かの機会がなくてはそれもできませんで、まだそのままになっております」

「お上の御用が多いのか、自身の愛が淡うすいのか、そうそう見舞つてくれませんか。お話しになりたいとおっしゃるのはどんなことでしょう。中將が恨めしがっていることもあるのですが、私は何も初めのことは知りませんが、冷淡な態度をあの子にとるのを見ていますね、一度立つた噂うわさはそんなことで取り返されるものではなし、かえつて二重に人から譏そしらせるようなものだとは私は忠告もしましたが、昔からこうと思ったことは曲げられない性質でね、私は不本意に傍観しています」

大宮が中將のことであろうとお解しになつて、こうお言いになるのを聞いて、源氏は笑いながら、

「今さらしかたのないこととして許しておやりになるかと思ひまして、私からもそれとなく希望を述べたこともあるのですが、断然お引き分けになろうとするお考えらしいのを見

まして、なぜ口出しをしたかときまり悪く後悔をしております。まあ何事にも清めということがございますから、噂などは大臣の意志で消滅させようとすればできるかもしれない。とは見ていますが事実であつたことをきれいに忘れさせることはむずかしいでしょうね。すべて親から子と次第に人間の価値は落ちていきまして、子は親ほどだれからも尊敬されず、愛されもしないのであろうと中将を哀れに思っております」

などと言つたあとで源氏は本問題の説明をするのであつた。

「大臣にお話ししたいと思ひますことは、大臣の肉身の人を、少し朦朧もうろうとしました初めの関係から私の娘かと思ひまして手もとへ引き取つたのですが、その時には間違ひであることも私に聞かせなかつたものですから、したがってくわしく調べもしませんで子供の少ない私ですから、縁があればこそと思ひまして世話をいたしかけましたものの、そう近づいて見ることもしませんで月日がたつたのですが、どうしてお耳にはいったのですか、宮中から御沙汰ごさたがありましてね、こう仰せられるのです。尚ないしのかみ侍の職が欠員であることは、そのほうの女官が御用をするのにたよる所がなくて、自然仕事に投げやりになりやすい、それで今お勤めしている故参の典ないしのすけ侍二人、そのほかにも尚侍になろうとする人たちの多い中にも資格の十分な人を選び出すのが困難で、たいてい貴族の娘の声望のある者で、

家庭のことに携わらないでいい人というのが昔から標準になっているのですから、欠点のない完全な資格はなくても、下の役から勤め上げた年功者の登用される場合はあっても、ただ今の典侍にまだそれだけ力がないとすれば、家柄その他の点で他から選ばなければならぬことになるから出仕をさせるようにというお言葉だったのです。私の家の子が相応しないことも思うわけのものでございせんから、私も宮中の仰せをお受けしようという気になったのでございます。宮仕えというものは適任者であると認められれば役の不足などは考えるべきことではありません。後宮ではなしに宮中の一課をお預かりしているいろいろな事務も見なければならぬことは女の最高の理想でないように思う人はあっても、私はそうとも思っておりません。仕事は何であつてもその人格によつてその職がよくも見え、悪くも見えるのであると、私がそんな気になりました時に、娘の年齢のことを聞きましたことから、これは私の子でなくてあの方のだということがわかったのです。なおお目にかかりましてその点なども明瞭めいりょうにいたしたいと思います。機会がなくてはお目にかかれませんが、おいでを願つてこの話を申し上げようといはしましたところ、あなた様の御病氣のことを言い出しになりましたしてお断わりのお返事をいただいたのですが、それは實際御遠慮申すべきだと思いますものの、こんなふうにおよろしいところを拝見できたので

すから、やはり計画どおりに祝いの式をさせたいと思うのです。内大臣にもやはりその節御足労を願いたいと思うのですが、あなた様からいくぶんそのこともおにおわしになったお手紙をお出しくださいませんか」

と源氏は言うのであった。

「まあそれは思いがけないことでございますね。内大臣の所ではそうした名のりをして来る者は片端から拾うようにしてよく世話をしているようですがね、どうしてもあなたの所へ引き取られようとしたのでしょうか。前から何かのお話を聞いていて出て来た人なのですか」

「そうなつていく訳がある人なのです。くわしいことは内大臣のほうがよくおわかりになるくらいでしょう。凡俗の中の出来事のように、明らかにすればますます人が噂うわさに上せたりするようなことと思われますから、中將にもまだくわしく話してございません。あなた様も秘密にあそばしてください」

と源氏は注意した。

内大臣のほうでも源氏が三条の宮へ御訪問したことを聞いて、

「簡単な生活をしていらつしやる所では太政大臣の御待遇にお困りになるだろう。前驅の人たちを饗きやう応おうしたり、座敷のお取りもちをする者もはかばかしい者がいないであろう、

中将は今日はお客側のお供で来ていられるだろうから」

すぐに子息たちそのほかの殿上役人たちをやるのであった。

「お菓子とか、酒とか、よいようにして差し上げるがいい。私も行くべきだがかえつてたいそうになるだろうから」

などと言っている時に大宮のお手紙が届いたのである。

六条の大臣が見舞いに来てくださったのですが、こちらは人が少なくてお恥ずかしくもあり、失礼でもありますから、私がわざとお知らせしたというふうでなしに来てくださいませんか。あなたとお逢いあになつてお話かしなりたいこともあるようです。

と書かれてあつた。何であろう、雲井くもいの雁かりと中将の結婚を許せということなのであろう

か、もう長くおいでになれない御病体の宮がぜひにとそのことをお言いになり、源氏の大臣が謙遜けんそんな言葉で一言その問題に触れたことをお訴えになれば自分は拒否のしようがない。中将が冷静で、あせつて結婚をしようとしなのを見ていることは自分の苦痛なのであるから、いい機会があれば先方に一步譲つた形式で許すことにしよう大臣は思った。

そしてそれは大宮と源氏が合議されてのことであるに違いないと気のついた大臣は、それであればいつそう否みよふのないことであると思われるが、必ずしもそうでないと思つた。

こうした時にちよつと反抗的な気持ちの起こるのが内大臣の性格であつた。しかし宮もお手紙をおつかわしになり、源氏の大臣も待つておいでになるらしいから伺わなないでは双方へ失礼である。ともかくもその場になつて判断をすることにしようと思つて、内大臣は身なりを特に整えて前駆などはわざと簡単にして三条の宮へはいつた。子息たちをおおぜい引きつれてゐる大臣は、重々しくも頼もしい人に見えた。背の高さに相応して肥つた貫ふと緑のある姿で歩いて来る様子は大臣らしい大臣であつた。紅紫の指貫さしぬきに桜の色の下した襷たすきの裾すそを長く引いて、ゆるゆるとした身のとりなしを見せていた。なんというりっぱな姿であろうと見えたが、六条の大臣は桜の色の支那錦しなにしきの直衣のうしの下に淡色うすいろの小袖こそでを幾つも重ねたくつろいだ姿でいて、これはこの上の端麗なものはないと思われるのであつた。自然に美しい光というようなものが添つていて、内大臣の引き繕つた姿などと比べる性質の美ではなかつた。おおぜいの子息たちがそれぞれりっぱになつていた。藤大納言、東宮大夫たけうなどという大臣の兄弟たちもいたし、蔵人頭くらうどのかみ、五位の蔵人、近衛このえの中少将、弁官などは皆一族で、はなやかな十幾人が内大臣を取り巻いていた。その他の役人もついて来ていて、たびたび杯がまわるうちに皆酔いが出て、内大臣の豊かな幸福をだれもだれも話題にした。源氏と内大臣は珍しい会合に昔のことが思い出されて古いころからの話がかわ

された。世間で別々に立っている時には競争心というようなものも双方の心に芽ぐむのであるが、一堂に集まってみれば友情のよみがえるのを覚えるばかりであった。隔てのない会話の進んでいく間に日が暮れていった。杯がなお人々の間に勧められた。

「伺わないでは済まないのですが、今日来いというようなお召しがないものから、失礼しておりまして、お叱りを受けそうではありません」

と内大臣は言った。

「お叱りは私が受けなければならぬと思つてゐることがたくさんあります」

と意味ありげに源氏の言うのを、先刻から考へていた問題であらうと大臣はとつて、ただかしこまつていた。

「昔から公人としても私人としてもあなたとほど親しくした人は私にありません。翅はねを並べるといふようにして将来は国事に携わろうなどと当時は思つたものですがね、のちになるとお互いに昔の友情としては考えられないようなこともありますからね。しかしそれは区々たることですよ。だいたいの精神は少しも昔と変わつていないのですよ。いつの間にかとつた年齢としを思いましても昔のことが恋しくてなりませんが、お逢いあのできることもまれにしかありませんから、勝手な考えですが、私のように親しい者の所へは微行しのびでもお訪たずね

ねくださればいいと恨めしい気になっている時もあります」

と源氏が言った。

「青年時代を考えてみますと、よくそうした無礼ができたものだと思いますほど親しくさせていただきまして、なんらの隔てもあなた様に持つことがありませんでした。公人といましては翅はねを並べるとお言いになりますような価値もない私を、ここまでお引き立てくださいました御好意を忘れるものでございませんが、多い年月の間には我知らずよろしくないことも多くいたしております」

などと大臣は敬意を表しながら言っていた。この話の続きに源氏は玉鬘たまかざらのことを内大臣に告げたのであった。

「何たることでしよう。あまりにうれしい、不思議なお話を承ります」

と大臣はひとしきり泣いた。

「ずっと昔ですが、その子の居所が知れなくなりましたことで、何のお話の時でしたか、あまりに悲しくてあなたにお話したこともある気がいたします。今日私もやつと人数ひとかずになつてみますと、散らかっております子供が気になりまして、正直に拾い集めてみますと、またそれぞれ愛情が起こりまして、皆かわいく思われるのですが、私はいつもそうし

ていながら、あの子供を最も恋しく思い出されるのでした」

この話から、昔の雨夜の話に、いろいろと抽象的に女の品しなさだ定めをしたことも二人の間に思い出されて、泣きも笑いもされるのであった。深更になってからいよいよ二人の大臣は別れて帰ることになった。

「こうしてごいっしょになることがありますと、当然なことですが昔が思い出されて、恋しいことが胸をいっぱいにして、帰って行く気になれないのですよ」

と言って、あまり泣かない人である源氏も、酔い泣きまじりにしめっぽいふうを見せた。大宮は葵夫人あおいのことをまた思い出しておいでになった。昔のはなやかさを幾倍したのもたもしれぬ源氏の勢いを御覧になって、故人が惜しまれてならないのでおありになった。しおしおとお泣きになった、尼様らしく。

源氏はこうした会見にも中将のことは言い出さなかった。好意の欠けた処置であると感じた事柄であつたから、自身が口を出すことは見苦しいと思つたのであつた。大臣のほうでは源氏から何とも言わぬ問題について進んで口を切ることもできなかったのである。その問題が未解決で終わったことは愉快でもなかった。

「今晚お邸やしきまでお送りに参るはずですが、にわかにそんなことをいたしますのも人騒がせ

に存ぜられますから、今日のお礼はまた別の日に参上して申し上げます」

と大臣が言うのを聞いて、それでは宮の御病氣もおよろしいように拝見するから、きつと申し上げた祝いの日に御足労を煩わしたいということを源氏は頼んで約束ができた。非常に機嫌よく大臣たちは会見を終えて宮邸を出るのであったが、その場にもまたいかめしい光景が現出した。内大臣の供をして来た公達などはたまさかの会合が朗らかに終わったのは何の相談があつたのであろう、太政大臣は今日もまた以前のように内大臣へ譲ることが何かあつたのではないかなどという臆測をした。玉鬘のことであらうなどとはだれも考えられなかつたのである。

内大臣は源氏の話を聞いた瞬間から娘が見たくてならなかつた。逢わ^あないでいることは堪えられないようにも思うのであるが、今すぐに親らしくふるまうのはいかなものである、自家へ引き取るほどの熱情を最初に持った源氏の心理を想像すれば、自分へ渡し放しにはしないであらう、りっぱな夫人たちへの遠慮で、新しく夫人に加えることはしないが、さすがにそのまま情人としておくことは、実子として家に入れた最初の態度を裏切ることになる世間体をはばかって、自分へ親の権利を譲つたのであらうと思うと、少し遺憾な氣も内大臣はするのであつたが、自分の娘を源氏の妻に進めることは不名誉なことである

はずもない、宮仕えをさせると源氏が言い出すことになれば女御にようごとその母などは不快に思うであろうが、ともかくも源氏の定めることに随したがうよりほかはないと、こんなことをいろいろと大臣は思つた。これは二月の初めのことである。十六日からは彼岸になつて、その日は吉日でもあつたから、この近くにこれ以上の日がないとも暦こよみの博士はかせからの報告もあつて、玉鬘たまかざらの裳着もぎの日を源氏はそれに決めて、玉鬘へは大臣に知らせた話もして、その式についての心得も教えた。源氏のあたたかい親切は、親であつてもこれほどの愛は持つてくれないであらうと玉鬘にはうれしく思われたが、しかも実父に逢う日の来たことを何物にも代えられないように喜んだ。その後には源氏は中将へもほんとうのことを話して聞かせた。不思議なことであると思つたが、中将にはもつともだと合点されることもあつた。失恋した雲井くもいの雁かりよりも美しいように思われた玉鬘の顔を、なお驚きに呆然ぼうぜんとした気持ちの中にも考えて、気がつかなくなつたと思わぬ損失を受けたような心持ちにもなつた。しかしこれはふまじめな考えである、恋人の姉妹ではないかと反省した中将はまれな正直な人と言ふべきである。

十六日の朝に三条の宮からそつと使いが来て、裳着の姫君への贈り物の櫛くしの箱などを、にわかなことではあつたがきれいにできたのを下された。

手紙を私がおあげするのも不吉にお願いにならぬかと思い、遠慮をしたほうがよろしいとは考えるのですが、おとな大人におなりになる初めのお祝いを言わせてもらうことだけは許していただけるかと思つたのです。あなたのお身の上の複雑な事情も私は聞いていますことを言つてよろしいでしょうか、許していただければいいと思います。

ふたかたに言ひもてゆけば玉櫛たまくしげ笥わがみはなれぬかけごなりけり

と老人の慄ふるえた字でお書きになつたのを、ちやうど源氏も玉鬘のほうにいて、いろいろな式のことの指図さしずをしていた時であつたから拝見した。

「昔風なお手紙だけれど、お気の毒ですよ。このお字ね。昔は上じやうず手な方だつただけけれど、こんなことまでもおいおい悪くなつてくるものらしい。おかしいほど慄えている」

と言つて、何度も源氏は読み返しながら、

「よくもこんなに玉櫛笥にとらわれた歌が詠よめたものだ。三十一文字の中にほかのことは少ししかありませんからね」

そつと源氏は笑つていた。中ちゆうぐう宮から白い裳も、唐衣からぎぬ、小袖こそで、髪上げくしあの具などを美し

くそろえて、そのほか、こうした場合の贈り物に必ず添うことになっている香の壺つぼには支し那なの薰くんこう香こうのすぐれたのを入れてお持たせになった。六条院の諸夫人も皆それぞれの好みで姫君の衣裳いしやうに女房用の櫛や扇までも多く添えて贈った。劣り勝りまさもない品々であつた。聡明そうめいな人たちが他と競争するつもりで作りととのえた物であるから、皆目と心を楽しませる物ばかりであつた。東の院の人たちも裳もぎ着ぎの式のあることを聞いていたが、贈り物を差し出てすることを遠慮していた中で、末摘花夫人は、形式的に何でもしないではいられぬ昔風な性質から、これをよそのことにしては置かれないと正式に贈り物をこしらえた。愚かしい親切である。青鈍色あおにびの細長、落栗色おちくりとか何とかいつて昔の女が珍重した色合いの袴一具はかま、紫が白けて見える霰地あられじの小桂こうちぎ、これをよい衣裳箱に入れて、たいそうな包み方たまかずらもして玉鬘たまかすらへ贈つて来た。手紙には、

ご存じになるはずもない私ですから、お恥ずかしいのですが、こうしたおめでたいことは傍観していられない氣になりました。つまらない物ですが女房にでもお与えください。とおおように書かれてあつた。源氏はその来ているのを見て氣まずく思つて例のよいなことをする人だと顔が赤くなつた。

「これは前代の遺物のような人ですよ。こんなみじめな人は引き込んだままにしているほ

うがいに、おりおりこうして恥をかきに來られるのだ」

と言つて、また、

「しかし返事はしておあげなさい。侮辱されたと思うでしょう。親王さんが御秘藏になすつたお嬢さんだと思つと、輕蔑けいべつしてしまうことのできない、哀れな氣のする人ですよ」
とも言うのであつた。小桂の袖の所にいつも変わらぬ末摘花の歌が置いてあつた。

わが身こそうらみられけれから唐からごろも君が袂たもとに馴なれずと思へば

字は昔もまずい人であつたが、小さく縮かんだものになつて、紙へ強く押しつけるように書かれてあるのであつた。源氏は不快ではあつたが、また滑稽こっけいにも思われて破顔してゐた。

「どんな恰好かっこうをしてこの歌を詠よんだらう、昔の氣力だけでもなくなつてゐるのだから、大騒さわぎだつたらう」

とおかしがつてゐた。

「この返事は忙しくても私がする」

と源氏は言つて、

不思議な、常人の思い寄らないようなことはやはりなさらないでもいいことだったのですよ。

と反感を見せて書いた。また、

からごろもまた唐衣からごろも返す返すも唐衣なる

と書いて、まじめ顔で、

「あの人が好きな言葉なので、こう作つたのです」

こんなことを言つて玉鬘に見せた。姫君は派手はでに笑いながらも、

「お気の毒でございます。嘲ちやうろう弄ろうをなさるようになるではございせんか」

と困つたように言つていた。こんな戯れも源氏はするのである。

内大臣は重々しくふるまうのが好きで、裳着の腰結こしゆい役を引き受けたにしても、定刻より早く出掛けるようなことをしないはずの人であるが、玉鬘のことを聞いた時から、一刻も早く逢いたいという父の愛が動いてとまらぬ気持ちから、今日は早く出て来た。行き届

いた上にも行き届かせての祝い日の設けが六条院にできていた。よくよくの好意がなければこれほどまでにできるものではないと内大臣はありがたくも思いながらまた風変わりなことにあつてゐる氣もした。夜の十時に式場へ案内されたのである。形式どおりの事のほかに、特にこの座敷における内大臣の席に華美な設けがされてあつて、数々の肴さかなの台が出た。燈火を普通の裳着もぎの式場などよりもいささか明るくしてあつて、父がめぐり合つて見る子の顔のわかる程度にさせてあるのであつた。よく見たいと大臣は思いながらも式場でのこと、単に裳もの紐ひもを結んでやる以上のこともできないが、万感が胸に迫るふうであつた。源氏が、

「今日はまだ歴史を外部に知らせないことでございますから、普通の作法におとめください」

と注意した。

「実際何とも申し上げようがありません」

杯の進められた時に、また内大臣は、

「無限の感謝を受けていただかなければなりません。しかしながらまた今日までお知らせくださいませんでした恨めしさがそれに添うのもやむをえないこととお許しください」

と言った。

うらめしや沖つ玉藻たまもをかつくまで磯隠いそれける海人あまの心よ

こう言う大臣に悲しいふうがあつた。玉鬘たまかずらは父のこの歌に答えることが、式場のことであつたし、晴れがましくてできないのを見て、源氏は、

「寄辺よるべなみかかる渚なぎさにうち寄せて海人も尋ねぬ藻屑もくづとぞ見し

御無理なお恨みです」

代わつてこう言つた。

「もつともです」

と内大臣は苦笑するほかはなかつた。こうして裳着の式は終わったのである。親王がた以下の来賓も多かったから、求婚者たちも多く混じっているわけで、大臣が饗きやう応おうの席へ急に帰つて来ないのはどういふわけかと疑問も起こしていた。内大臣の子息の頭中とうちゆう将と

弁^{べん}の少将だけはもう真相を聞いていた。知らずに恋をしたことを思つて、恥じもしたし、また精神的恋愛にとどまったことは幸^{しあわ}せであつたとも思つた。

弁は、

「求婚者になろうとして、もう一步を踏み出さなかつたのだから自分はよかつた」と兄にささやいた。

「太政大臣はこんな趣味がおりになるのだろうか。中宮と同じようにお扱いになる氣だろうか」

とまた一人が言つたりしていることも源氏には想像されなかつたが、内大臣に、「当分はこのことを慎重にしていきたいと思います。世間の批難などの集まつてこないようにしたいと思うのです。普通の人なら何でもないことでしょうが、あなたのほうでも私のほうでもいろいろに言い騒がれることは迷惑することですから、いつとなく事実として人が信じるようになるのがいいでしょう」

と言つていた。

「あなたの御意志に従います。こんなにまで御実子のように愛してくださいましたことも前生に深い因縁のあることだろうと思います」

腰結い役への贈り物、引き出物、纏頭てんとうに差等をつけて配られる品々にはきまつた式があることではあるが、それ以上に派手はでな物を源氏は出した。大宮の御病氣が一時支障になつていた式でもあつたから、はなやかな音楽の遊びを行なうことはなかつたのである。

兵部卿ひょうぶきやうの宮は、もう成年式も済んだ以上、何も結婚を延ばす理由はないとお言いになつて、熱心に源氏の同意をお求めになるのであつたが、

「陛下から宮仕えにお召しになつたのを、一度御辞退申し上げたあとで、また仰せがありますから、ともかくも尚な侍しのかみを勤めさせることにしまして、その上でまた結婚のことを考えたいと思います」

と源氏は挨拶あいさつをしていた。父の大臣はほのかに見た玉鬘たまかざらの顔を、なおもつとはつきり見ることができないであろうか、容貌ようぼうの悪い娘であれば、あれほど大騒ぎをして源氏は大事がつてはくれまいなどと思つて、まだ見なかつた日よりもいっそう恋しがつていた。今になつてはじめて夢占いの言葉が事実にあつたことも思われたのである。最愛の娘である女御にようにだけ大臣は玉鬘のことをくわしく話したのであつた。

世間でしばらくこのことを風評させまいと両家の人々は注意していたのであるが、口さがないのは世間で、いつとなく評判にしてしまったのを、例の蓮葉はすつばな大臣の娘が聞いて、

女御の居間に頭中将や少将などの来ている時に出て来て言った。

「殿様はまたお嬢様を発見なすつたのですってね。しあわせね、両方のお家うちで、大事がられるなんて。そして何ですってね。その人もいいお母様から生まれたのではないのですってね」

と露骨なことを言うのを、女御は片腹痛く思つて何とも言わない。中将が、

「大事がられる訳があるから大事がられるでしょう。いったいあなたはだれから聞いてそんなことを不謹慎に言うのですか。おしやべりな女房が聞いてしまうじやありませんか」と言つた。

「あなたは黙つていらつしやい。私は皆知つています。その人は尚ないしのかみ侍になるのです。

私が女御さんの所へ来ているのは、そんなふうに引き立てていただけるかと思つてですよ。普通の女房だつてしやしない用事までもして、私は働いています。女御さんは薄情です」と令嬢は恨むのである。

「尚侍が欠員になれば僕たちがそれになりたいと思つてゐるのに。ひどいね、この人がなりましたるなんて」

と兄たちがからかつて言うのと、腹をたてて、

「りっぱな兄弟がたの中へ、つまらない妹などはいつて来るものじゃない。中将さんは薄情です。よけいなことをして私を家^{うち}へつれておいでになって、そして軽^{けい}蔑^{べつ}ばかりなさるのだから、平凡な人間ではごいっしょに混じつていられないお家だわ。たいへんなたいへんなりっぱな皆さんだから」

次第にあとへ身体^{からだ}を引いて、こちらをにらんでいるのが、子供らしくはあるが、意地悪そうに目じりがつり上がっているのである。中将はこんなことを見ても自身の失敗が恥ずかしくてまじめに黙っていた。弁の少将が、

「そんなふうにあなたは論理を立てることができる人なのですから、女御さんも尊重なさるでしょうよ。心を静めてじつと念じていれば、岩だつて沫^{あわ}雪^{ゆき}のようにすることもできるのですから、あなたの志望だつて実現できることもありますよ」

と微笑しながら言っていた。中将は、

「腹をたててあなたが天^{あま}の岩戸の中へはいつてしまえばそれが最もいいのですよ」と言つて立つて行つた。令嬢はほろほろと涙をこぼしながら泣いていた。

「あの方たちはあんなに薄情なことをお言いになるのですが、あなただけは私を愛してくださいますから、私はよく御用をしてあげます」

と言つて、小まめに下の童女さえしかねるような用にも走り歩いて、一所懸命に勤めては、

「尚侍に私を推薦してください」

と令嬢は女御を責めるのであつた。どんな気持ちでそればかりを望むのであらうと女御はあきれて何とも言うことができない。この話を内大臣が聞いて、おもしろそうに笑いがら、女御の所へ来ていた時に、

「どこにいるかね、近江^{おうみ}の君、ちよつとこちらへ」と呼んだ。

「はい」

高く返辞をして近江の君は出て来た。

「あなたはよく精勤するね、役人にいいだろうね。尚侍にあんたがなりたいということをなぜ早く私に言わなかったのかね」

大臣はまじめ顔に言うのである。近江の君は喜んだ。

「そう申し上げたかったのでございますが、女御さんのほうから間接にお聞きくださるでしょうと御信賴しきつていたのですが、おなりになる人が別においでになることを承りま

して、私は夢の中だけで金持ちになっていたという気がいたしましてね、胸の上に手を置いて吐息ばかりをつく状態でございました」

とても早口にべらべらと言う。大臣はふき出してしまいそうになるのをみずからおさえ、

「つまり遠慮深い癖が禍いしたのだね。私に言えばほかの希望者よりも先に、陛下へお願いしたのだったがね。太政大臣の令嬢がどんなにりっぱな人であっても、私がぜひとお願いすれば勅許がないわけはなかったろうに、惜しいことをしたね。しかし今からでもいいから自己の推薦状を美辞麗句で書いて出せばいい。巧みな長歌などですれば陛下のお目にきつととまるだろう。人情味のある方だからね」

とからかっていた。親がすべきことではないが。

「和歌はどうやらこうやら作りますが、長い自身の推薦文のようなものは、お父様から書いてお出しくださいましたほうがと思います。二人でお願いする形になって、お父様のお蔭がこうむられます」

両手を擦り合わせながら近江の君は言っていた。几帳の後ろなどで聞いている女房は笑いたい時に笑われぬ苦しみをなめていた。我慢性のない人らは立って行ってしまった。

女御も顔を赤くして醜いことだと思っているのであった。内大臣は、

「気分の悪い時には近江の君と逢うあのがよい。滑稽こっけいを見せて紛らせてくれる」

とこんなことを言つて笑いぐさに行っているのであるが、世間の人は内大臣が恥ずかしさをごまかす意味でそんな態度もとるのであると言つていた。

青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 中巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年11月30日改版初版発行

1994（平成6）年6月15日39版発行

※このファイルは、古典総合研究所（<http://www.genji.co.jp/>）で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には2002（平成14）年1月15日4版発行を使用しました。

入力：上田英代

校正：伊藤時也

2003年9月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

行幸

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>